

又正義の爲めには少しも逡巡することがない。彼の衣食に乏しい一寒僧をして『一閻浮提第一の富めるものは吾あり』又『吾によりて國家の有無あり』と絶叫して、正義の爲めには他人の忌諱に觸るゝもなほ辭せしめあかつた。現下宗教の大部分は因襲の久しきによつてか、教權は己に地に落ち果てゝしまつた。彼のキリスト教の如きも、長い間歐洲の天地に教權を擅にして居つたが、今は見る通りの不完全極まる宗教と化けてしまつた。今後人生の意義と價値との爲めに、精神的存在の救助を依頼して安心の出来る完全な宗教とするには恐らく非常の動搖と強い改革が行はれてからであらう。

嗚呼眞に平和を希ふ者よ!!我日蓮主義に來れ!!
汝が日常生活に意義あらしめ、其の把る手段に對して開顯の光を授け、以て其の向上の進路をば開拓されるであらう。(をばり)

無 題 錄

太 田 純 志

今宵は一切の物音が消えて、四邊が死んだやうに静かきのに、木々の繁みを外けて來る懸樋の水の音のみひとり先にと目醒めてゐる。月光の海峽へ立つ山、御題目の聲、秋虫の囁やき、かういふものが私の心の内にある一切の不純なものを、純粹と眞率の世界に導く充分なる魅力をもつて居る。私は心をひそめてかふ云ふ自然に對ふ時、自然のうちにある相背反する矛盾が自然の姿に無くてかなはぬ意味深い性質であると思ふ。なせなれば自然の美しいのはそれがつねにそれ自身の本來の姿であるからだ。圓滿なる月は大自然の意志と愛とによつて無限の希望と光明とによみがへつて居る。偉大なる自然の營み、それは幾度か人間の小ささ、貧しさ、弱さ、醜さを痛まじめる對照として、各自の間に提唱された。或る者は自然を讚美し措かあかつた、或る者は自然を呪ひ止まなかつ

た。しかしそれ等はいづれも自己の弱小を自覺した者の、堪え難い感激の發露である。自然を對照とした自己批判の悲痛なる絶叫である。人間の美しいのも、その人が其の人自身の本來の姿、即ち自分の心がよりよく眞に生きやうと言ふ要求に燃えはじめた時の絶對自己の素質そのものである。素質は人間の一切であり、生活の一切である。人が自己の眞の素質に返つた時に、眞の悦びあり美があるものである。

人間は自然と自己ばかりでは無い。生活の柵は當然のものである。現代の僧侶てふ世界に其の分子として生きて居る吾人は、それが自己を照觀した場合、貧しいながらも自己の思想と現代の宗教乃至宗門そのものに對して、非常なる不平を痛感するのである。若し或宗門の僧となつて何の惱みも無く、その宗門の確實なる信仰に入り得る人々は、それ程幸ふ事は亦からう。兎角口でこそたやすく信心とか信仰とか云ふが、眞實信仰し信心する事は容易な事でないからう。自我的信仰でも無

我的信仰でも信仰でさへあればかまはぬとは云へぬ。自己の全心を込めて其の對象を戀ひ慕ひ、終に其の靈光の中に全体を没入する絶對忘我の境でなければならぬ。吾人は如斯信仰をば如何にして求むべきか。即ち平生の自己と、眞に生きやうとする自己とが共鳴して得る靈的生活であらう。然し自己の思想がまだ不變の精神的信念を形成しない以上、よし最後にその宗門の信念に歸着する事があるとしても、時々刻々自己の宗門そのもの、信仰に近づきつゝあると思ふ確實ある豫感なき以上は、僧侶としての生活を續け行く事は大なる矛盾、大なる罪惡であらねばならぬ。自己の思想が自己の宗門と幾分なりとも異つた方面に向進する時は、決然と去るか、又は自己に層一層の死力をつくすか、最も強者であらう。然し現代の僧として自己の宗門の信條に確實ある歸依と愉悅を有して、現實生活上に新しき靈的生活を具現し得る者は多少何れであらう、それに何等の矛盾も不平も感ずる事なく、精神的惰眠に日夜安逸ある因襲生

活を送り、飽腹しつゝある者は最も弱者と云はねばからぬ。それにしても吾人が宗教上の自由的思想と、その結果ある自由思想の具現を要求すとは云へ、現時の宗教が傳統的であり、史的發展的なる以上は、全然無意義な努力である。吾人はかゝる索縛より脱して、眞に自由なる思想の伸展を計るべきである。かゝる傳統的形式中にあつて、思想上に何等必然的の理由なくして宗門その物と同化し、亦強ひて同化せんと努力するが如きは、之全く恐るべき精神的自殺である。個人間の精神的自殺はひいては死佛敎を形成する一大根原である。現下の宗教々育なる者は如是精神的死滅者を雨後の筍の如く出しつゝあるのである。之れ全く社會的寄生民である。眞に現代は一切の皮相と形式的許さぬ、現實の苦悶に醒めたる民衆は、一切の者をその中心にまでさぐり、最後に發見したる人間の眞實を強要するまで眞度の度をまして居る。彼等は叫んで居る。『ミッシヨンスクールを立立ての青年牧師が安珍が清姫を憲ふるが如く……』

…神よ」と齒の浮く様な輕佻な説敎や、小高等遊民然たる青年僧侶の聲色使ひの説敎ほど甚だしいものはない。「我れ叫ばずんば石叫ばん」の熱烈なる要求よりの説敎傳導なればこそ天來の聲として吾人は襟を正うするであらう」と。故にかゝる時代の敎導者たらんものは、宜しく傳統的形式中より脱して、吾人の内にある本然性を表現すると云ふ事は、最も必要を事であらう。

自分は幼かい頃よく寢物語りに聞かされたり、書物で讀んだりした幾多の古い歴史上の事實を思ひ浮べたその中で、自分の驚異と疑惑とを繋いで居るものは謀叛人の心理であつた。彼等が先づ其の計畫を實行せんとする時は、目的を皆高所に卜して將に彼等自らの版圖に入らんとする地域の展望を自由にした、彼等は戦闘上の地の利を劃する爲めの共通の行爲であつたとしても、決してそればかりではあかつた。自分は今にして彼等の心理を全く了解する事が出來た。偉大なる自然の靈に接觸して、其の極まりなき力のリズムに交流する

自己靈の極度の勇躍を欲したからであつた。如何に彼等は緊張した『生』の祝福を痛感したらう。實際彼等ばかりでは無い、古より宗教的生産者としてその異彩をはなてる者は、すべて如實なる自我即ち本然性の開發であつた。時は移り月は行き年は去つた。傳統者の形式的生活が次第に流行するにつれて、非人間的なる形骸的信條を残した。この様に述べ來り述べ去つての形式打破と人間本然性の實現、それこそ眞の醒めたる宗教が現出すべきである。

以上自分の言は甚だ漠然として居る、然し八万四千の法を説き玉へる世尊でさへも『一字不説』と一切を否定して居られる。只詮する所は社會的形式の宗教宣傳に空しき努力をし、私の生活は因襲的形式に捕へられたる宗教者を見、眞に現代民衆の爲め宗教家たる任務を果さんため益々各人內的に生き、個的に充實せしめ、純眞にして然も強烈なる要求を抱き、以て向後の宗教的活動をして眞に意義あらしめん事を痛切に望むのである。(完)

日蓮主義と戰爭

露 月

配所の月淡く西天に影を止む東條旃陀羅の伏屋習々と吹く貞應の春風に、邊りの礎に白蓮華靜に笑みぬ。

涌くが如き孤々の聲旭日と共に迷雲漂ふ凡界を突き、奇瑞は後日の空しからぬ活躍のスタイルをそ物語りき。

畏くも靈山の直使たる上人、嗚呼凡夫に示同せられ如蓮華在水の光明永世衆人の座右の銘とありぬ。惟に上人は春花秋聲涼台温衣總て朝露の快樂に蕩されず、金鐵からぬ靈體は着るに服なく常に三類の強敵を身に纏ひ、座すに疊なく電光閃く秋水の下に座され、住むに家なく怒濤白く嘯む岩頭に立たれ、臥すに床なく、霜風雪花の塚原に臥せられ、行住座臥困苦と壓搾とを以て日記を綴られ給ひ、南船北馬席温まるの一割だになかりき。果熟す弘安の冬不滅の滅に入り給ふ。上人の靈體將